

生成AI時代 生徒の思考を どう深めるか？

2022年11月にOpenAIがChatGPTを公開して以降、生成AIは急速に進化し、社会に大きな影響をもたらしています。その1つが産業・就業構造の変化です。経済産業省が示した推計（＊1）によると、生成AI・ロボットによる自動化等の影響で、2040年には事務職に約440万人の余剰が生じる一方で、専門的・技術的職業のうちAI・ロボット等の活用を担う人材が約340万人不足するという、人材需給のミスマッチの可能性が指摘されています。また、生成AIによって大量に生み出された偽・誤情報がSNS等を通じて拡散され、いわゆる「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」などによって人々の価値観の偏りが助長されることで、民主主義社会の分断が進むことも懸念されています。そうした生成AI時代を生きていく高校生の間にも、生成AIは浸透してきています。ベネッセ教育総合研究所の25年実施の調査（＊2）によると、学習で生成AIを使うことがある高校生の57.7%、学習以外（遊びなど）で生成AIを使う高校生の48.7%に上りました。

学習における生成AIの利活用においても正負の両面があります。すなわち、生成AIを活用することで、生徒が自らの考えを広げたり、深めたりすることが期待される一方で、生成AIにすぐに答えを求めるなど、必要な学習過程や思考のプロセスが省略されるような活用に対する懸念も指摘されています。そこで本特集では、そうした正負の側面を踏まえながら、生成AI時代に生徒自身が思考することにはどのような意義があるのか、教師はどのようにして生徒の思考を深めることができるのかについて、考えてまいります。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.8 課題整理

生成AI時代だからこそ、
「深く思考する」教育活動の充実を
東京学芸大学 教育学部 教授 高橋 純

P.12 事例1

入学直後に生成AIの使い方を学び、
学校全体で情報教育を推進
山形県立酒田光陵高校

P.15 事例2

「思考する喜び」を実感できるよう、
生成AIを活用した授業改善に挑む
埼玉県立大宮高校

P.18 事例3

生成AIが生徒の学びに適切な負荷をかけ、
教科学習・探究学習を深める
滋賀県・私立立命館守山中学校・高校

P.21 本特集を振り返って

生成AIを学びのパートナーとし、
人生のオーナーシップを育む
国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 部長 しろす はじめ
教育データサイエンスセンター 副センター長 白水 始

＊1 2026年3月5日産業構造審議会経済産業政策新機軸部会「2040年の就業構造推計（改訂版）について」。

＊2 ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2025」（2025年7～9月に実施。高1～3生1,927人の回答結果）。

生徒が生成AIを利用して志望理由書や履歴書を作成すると、本人のスキル以上の文章に仕上がる傾向がある。美辞麗句を連ねた文章を基に面接試験に挑むと、書いてある文章と実際に面接で語る内容とに大きな乖離が生じ、それが理由となって不合格となる事例が散見される。不合格にならずとも、志望理由書に書いたこと以外のことに対する質問が多くなり、面接のハードルが極端に上がるという皮肉が生じている。 三重県・公立

要領のよい生徒は、作文の課題を、教師の様子をうかがいながら生成AIに任せてしまうこともあり、課題の出し方を迷うことが増えた。

東京都・私立

生成AIの利活用に関して 高校現場で生じている問題・課題

音楽の授業の創作の場面では、「イメージや発想を基に音楽を考えること」が本質的で真正な学びの姿だが、そのプロセスや苦勞から逃れるために、生成AIに全面的に任せてうまくいかない生徒がいる。その生徒に対して、教師である私はどのような言葉かけをしたらよいか悩む。生成AIを活用すること自体は問題ではないが、人間がかかわるべき部分や、思考・判断・表現すべき部分の大切さをどのように説いていけばよいのか、教師としての資質・能力が求められていることを痛感している。 北海道・公立

生成AIを教育に取り込むことの是非が論じられていたのはつい3、4年前のことだったと思うが、今やどのように使うかという視点での議論だと思う。現在、希望者に対しての探究ゼミ活動を行っており、その際、生成AIが搭載された教材「キャリアナビ」(*)を使用している。志望理由書の壁打ちを行うことにより、生徒の考えの深まりを感じており、とても役に立っている。ただ、どのように使うのかについて、教師のアドバイスがあるかどうかで随分効果に差があるとも感じている。 三重県・私立

* ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。

※『VIEW next』高校版 読者コミュニティアンケート結果より(アンケートは2026年4、5月にウェブで実施)。

本 誌の読者コミュニティアンケートの回答(上記)には、生徒が自身の考えを深めるための壁打ちの相手に生成AIがなっていることから、生成AIの価値を認める教師の声がある一方で、創作や志望理由書の作成といった場面で生徒が自分で考えず、生成AIが出力した結果をそのまま自分の成果物としてしまう事態への危機感を示す教師の声も多く見られた。そして、同アンケートの声にも

あるように、学校現場における生成AIの活用は、もはやその導入の是非ではなく、「どのように活用するか」へと論点が移っている。

そこで今号では、生成AIの活用時における課題を整理した上で、生成AI時代に生徒自身が思考することにはどのような意義があるのか、教師はどのようにして生徒の思考を深めることができるのかについて、考えていく。

先生方とともに
考えたい「問い」

生成AI時代に
生徒自身が思考することにはどのような意義があるのか。
教師はどのようにして生徒の思考を深めることができるのか。